
なぜ野生生物保全教育が重要か

小原 秀雄

JWCS 会長（会報掲載時）・女子栄養大学名誉教授

なぜ野生生物の保全を成すべきだと思っているのか。なぜ、その教育を重視するのか。それは現代の人間の身心の変貌と関係しているとみなすからである。

1. 「人間（ヒト）」が自らその環境を形成する

今から約10万年前から3万年前にホモ・サピエンスが登場して以来、その他の動物と同じ意味での人間の形質の変化は大きくない。それで済むように自ら環境を作ってきたからである。人間の働きに対応して環境が分化していく。最初は石器を使い、それから洞穴に住んで火を使い人工的な住居を生み出すというように、自然環境から別の環境を分化させていったのである。人間がどういう存在なのかということを考える際に、人間の環境は、自然環境を基盤にしながら、道具を媒介として人間自身によって形成されていくこと（自分にとって必要あるいは快適なものを作っていく）、人間自身とその道具や生活環境との間に次々と相互関係が結ばれていくことが注目されるべきである。

こうした人間の具体的存在様式は、「人間（ヒト）」と表現できる。これは、社会的・文化的存在としての人間が生物的（自然的・物質的）な存在様式つまり種としてのヒトを内包していくことを意味している（たとえば、赤ん坊がたれ流しでおしめをするのは、樹上性のサルの性質をそのまま受け継いだものを文化的に包摂した形であるし、くしを使ったり、シャワーを浴びたりするのは他の哺乳類の毛づくろいや水浴びが変容したものである）。

なお、環境教育に関係している人たちの議論を聞くと、人間が環境を作っている点についての認識があいまいだという印象がある。事実、「環境」というとき、それはすなわち自然環境そのものか、あるいは汚染などとみなされがちであり、そのためこれまでの環境教育が、自然教育と公害教育の両極にてしまっているように見える。

2. 人間による精神環境の形成と教育

人間が環境を形成するというとき、作りだした物の全てが物質代謝（食物、大気、水など）により物質環境を形成するとともに、その要素とそれから構成される全てが精神環境を形成しているということは、なおさら認識されていないのではないだろうか。精神環境あるいは精神文化の発達と維持においては、動物と共通したしくみを基礎に「人間（ヒト）」に特殊な伝承の様式がみられる。つまり、道具なり言語なりを媒介にして得た知識や行動形成が加わった。そのために、他の哺乳類よりもいっそう長く、時には特別な育成が必要となったのであり、教育の役割が大きくなったのである。

しかし、身心の人間形成の基礎に、なお生物学的な仕組みが働いていることが忘れられている。動物行動学者であり、ノーベル賞を受賞したコンラート・ローレンツは、人間を含めたすべての動物は、環境の中の一部か全部かは別として、感覚を介して成長していく中で生まれつき持っている行動の型が、環境条件の中のある特定の対象（解発因）と結びついてその種に固有の行動が誘発・形成される、と指摘した（インプリンティング）。この理論は重要である。ヒトも、その赤ん坊が全ての感覚を介して接したものの全てがその後人間形成に影響する（細部は全く研究されていないが）結果、トータルな環境世界の中で生育し「人間」となると考えることができる。人間ときりはなされたヒトは存在し得ない。

このように、（個体発生レベルを含んで）人間が人間になっていく過程には、生物学的、生得的な種の個体の形成のしくみが内的に働いている。教育においては、直接に行動で示すというよりも言語を介して理解させることに力点が置かれがちである。しかし、子どもが幼ければ幼いほど、言語の意味を理解することは具体的な行動やものと結び付いている。認識上の言語の重要さはいうまでもないが、言語を介して行動形成がされたとしても、それが身につくとはいえず、教育の意図に沿っているとは言い切れない。社会化された自然として身の周りに構造化された具体物が、人間の子どもの解発因になったり認知する世界（環境）であり、その環境と相互関係を作り成育するからである。

ところが、近年、一般社会の傾向も学生も教師も、現実（実体）と観念とがかい離しており、コトバで説明できればそれでわかっていると「誤解」されたりする。Logic については確かに説明によってわかるのであるが、価値観の根本などを育成しようとする場合は、言葉で説明しても効果が少ないのではないか。言語以前の感覚を通じた価値観が形成される以上、他者あるいは次世代に伝承する感覚の世界がどう成立し、人間の中にどう組み入れられていくかの考察が需要である。

以上のとおり、人間が「人間（ヒト）」として、生物としての面を基礎にもち、それゆえ精神面での人間形成、精神環境の形成においても生物学的なしくみが基礎的な役割を果たしているわけである。

3. 人間による「人間（ヒト）」の形質形成と環境問題の発生・青少年の心の荒廃

自然の社会化の結果、社会を媒介とした自然との関係が新たに生じた。「人間（ヒト）」は、自然から取り出された物質を変容させ、人工的な物質を生産した。また、人間社会が形成される中で、動物にも見られる集団である家族や地域集団といったものにとどまらず、さまざまな環境、集団やシステムを作りあげた。こうして作りあげられた人工的な物質（それらは道具及びその派生物といえる）や人為的、人工的な環境などと人間との間で、さらに新たな相互関係が生じる。人間は、その相互関係の環境に自らを適応させてきたのである（自己人為淘汰）。このような過程で、人間は自分自身を飼いならすようにして、「人間（ヒト）」の形質を変化させ作り上げてきたのである（自己家畜化）。これが文化と文明の様相である。

それでも、自己人為淘汰とその結果としての自己家畜化のあり方として、社会的・文化的存在

としての「人間」であることと、生物としての「ヒト」であることが調和していれば、環境問題は生じなかったであろう。現代の「人間（ヒト）」は、もっぱら人工的な世界の中で、自身の形質を作り変えつつあり、文化＝非自然という結果になっている。これは、「人間（ヒト）」の持つ自己人為淘汰による自己家畜化の性向が、そのような物質や環境にも人間が適応してしまうことを科学技術が可能にしたためである。しかも、それは物質的な面にとどまらず、感覚を通して、精神的な面でまで適応していったのである。身心の不調を感じつつも、現在、これほどまでに環境問題が深刻化したのは、まさにそのためである。私は1963年頃には、人間は自分が作り出した文化、社会の肥大化に適応できず、絶滅するのではないかと書いていたが、今ではそうではないと考えるようになった。「人間（ヒト）」は、環境を人工化してカプセル化した中に自ら入り込み人間にとっての「自然さ」をますます失いつつ、とくに情報化によるサイバー・スペースの発達で、そのような社会に限りなく適応していくのである。環境問題の深刻化や、青少年の心の荒廃はその警告ではある。

4. 変革の構想—野生生物保全教育

すでに述べたとおり、人間が種（ヒト）としての性質を残していることは事実であり、それゆえ精神環境の形成と相互作用においても生物的なしくみが基礎的な役割を果たしているわけである。そうだとすれば、カプセル化の強化から転換し、人間環境形成の上でヒトの部分からの声なき声を反映させることが必要であり、その環境要素の中で相互関係を生む自然が絶対に必要である。

一方、自然は、野生生物（種）によって構成されている。したがってまた、野生生物は人間の精神環境の構成要素となる。われわれが今日の社会で人間が「人間らしさ」を失っていくのではないかと心配するなら、野生生物を人間環境の中で維持しなければならない。それは実現可能であろうか。

すでに述べたように、人間の精神面での人間形成に影響を与える精神環境は、文化の形成・伝承を通じて（欲望を取り入れることも含まれる）作りあげられていくものである。そうだとすれば、「新しい文化」としての野生動物との相互関係を、地球的規模から個人の生活環境まで、社会を通じて意識的に作っていくこと（すなわち「野生生物保全」）でのみ、野生生物すなわち自然が重要な構成要素となっている精神環境も維持・形成されていくであろう。

このような方向を目指すとき、現場での野生生物保全の活動とともに、全社会的に教育の役割が問われる。感性の働きをよく認識した上で、感覚をとおして野生生物の存在を理解する教育を行うことが必要である。その際、システム化した教育以前の育児などにおいても当然であるが、たとえ断片的ではあっても日常的に人間形成の過程で感覚器官を介して直接的に野生動物のいる自然と接触することがのぞましい。そして、その後段階を踏んで、理論を通じて人間環境の中の野生生物の意義についての理解を目指す教育を行うことが必要である。

さらに、これらの教育は、現場での（物質世界での）野生生物保全活動そのものを支える上でも重要な役割を果たす。家庭でも地域でも、生物そのものだけでなく、多様な物にふれ、多

彩な感覚を養い、その意味で豊かな世界（環境）の中で遊ぶことなどが望まれる。野生生物の消費規制などを環境倫理や生命倫理を介して発想したり、それに共感する心情がこうして情動し、そのような環境世界が強い欲求とならなければ、保全（新しい文化の形成）自体も成功しないであろうからである。

（JWCS 会報 No. 23 2001 年 1 月より転載）